

インタビュー

佐々木順三先生に聞く

佐々木 順三：一八九〇～一九七六。

※東京生まれ。桃山学院中学校一年生るとき、大阪聖ヨハネ教会で受洗。

※東京帝国大学文学部英文学科卒業。第八、第八、静岡、第一の各高等学校教授を歴任。戦時下、一九四三年には東京都立高等学校の校長に就任した。

※一九四六年、立教大学総長、立教中学校校長、立教工業理科専門学校校長に就任、キリスト教にもとづいた本来の建学精神による戦後復興を指揮した。立教小学校の新設、旧制立教中学校から新制立教中学校、高等学校の分離新設、財団法人立教学院の学校法人化などをなしとげ、五一年から立教学院院長も兼務。五五年に、立教のすべての役職から退いた。

聖公会を知るまで

——先生が桃山学院<sup>(1)</sup>のご出身だなどということは、初めて伺いました。(笑)。

佐々木 ああ、そうですか。

——桃山から静岡の中学へ？

佐々木 私の家は、国が沼津なのです。それで、私は沼津にいたのです。いつ頃だったかな……日露戦争前ですがね。父は建築技師をやっていました。西洋建築ですから、ほうぼうへ行くのです。西洋建築ということになると、やはり技師を頼むですね。

大阪に何とかという貯金銀行がありまして、煉瓦造りの西洋建築をやる。それで大阪へ行ったのです。それか

聞き手

松原 栄  
村田恵次郎

(一九七四年八月十七日収録)

註 伊藤俊太郎  
編 山中一弘

ら、家中みんなで向こうへ行っただのです。

それから向こうで、兄「二郎」<sup>⑧</sup>が沼津の中学校でしたから、途中から桃山中学校へ行っただけです。その頃はまだまだ府立は入りにくくて、桃山なら入れると。それで、兄はそこへ入ったのです。

私は昔でいう高等小学校一年のときに大阪へ行って、それから「大阪の」小学校へ入る。あの頃、中学校（の入学資格）は高等二年以上なので、二年から行く者、三年から行く者といういろいろいるわけです。私は二年のときにはまだ行かないで、そのまま高等（小学校）へ上がってしまったのです。

それから、やっぱり中学校へ早く入ったほうがいいからということ、思い付いて、行こうと思ったのですが、もう府立は（入試が）終わってしまっただ入れない。桃山は兄が行っていますから、それで桃山に入ったのです。桃山には二年ほどいました。

父は大阪の仕事を終えてから、今度は大連に行っていたのです。大連はちょうどその時分、ロシアが極東政策から旅順に要塞を造って、大連に輸入をして、いろいろな商社ができたわけです。すると、やはり東洋のほうには建築などする人がいないのです。だから、日本のあれに頼みました。父もそれで、ロシアの建築をしたのです。そのあいだ中、私達は大阪にいました。

そのうち、日露戦争が起こったわけです。父はロシアの仕事をしていたので、いざ戦争になると、何もしていなくても向こうでは捕まえてしまう。危ないということ、戦争の始まる一ヵ月か二ヵ月前、仕事を捨てて、逃げて帰ってきました。それから大阪にいたのですが、もう戦争が始まりまして、日本では西洋建築なんかやっていないものですから、失業してしまっただ。旅順で仕事を捨ててきたものですから。

そこで、みんな国へ帰ったのです。それで私は、沼津の中学校の三年級か何かになりました。

それから一高のほうへ？

佐々木 ええ、一高へ行っただのです。あの時分、高等学校は八つ、八高までしかなかったのです。やはり沼津からですと、東京が一番近いものですからね。で、一高を受けたのです。それでまあ、幸いに入りましてね。

その頃、ちょうど戦争も終わったので、父も仕事があって、家中で東京のほうに移ったのです。私は一年間遅れて行きましたけれども、沼津の（中学校で）五年級だけ残っていましたから。父達は東京にみんなと一緒に行きまして、私は一年間田舎にいて、それから東京に行きました。

一高へ入ったときは一九歳ですからね。一九歳というのは数えですから、一八ですか。今、八四歳ですからね。

そうですね。

佐々木 それから七〇年近い……。

一高から東大へ？

佐々木 ええ、東大です。それからあとは東京ですから。

文学部でございますか。

佐々木 文学部です。英文学です。だから、仕事をする  
と英語の先生役です。昔の英語の先生で、ちっともでき  
ない英語の先生です。

お父様が聖公会の信者でいらしたのですか。

佐々木 父は信者でも何でもないのです。

どのようなことで？

佐々木 それは桃山へ行くまで、私どもは何も関係ない  
のです。その頃、一番上の兄〔邦〕<sup>(8)</sup>が青山学院を出た  
のです。それから、兄は続いて……佐々木邦といいますが、慶應へ入りまして。実業家になろうと思ったのでしょ  
うね。ところが、慶應に入って二年ばかりたったときに  
日露戦争が起こったのです。それで父が仕事をなくした  
でしょう。それで「これは慶應に、とてもやれない」と。

ところが、昔のミッション・スクール時代はいいこと  
があるのですね。西洋人の家へ昼間、ちょっと暇なとき  
に行って掃除をやったり、お使いをしたり、学校の掃除  
をしたりしてね。ミッション・スクールはそんなことが  
できたのです。そういうことをしていたのです。だか

ら、どうしてももう一回、青山学院に帰ろうと。

これはちょっと話が違いますが、兄の全集がまた出る  
のですよ。

ユーモア全集ですか。(笑)。

佐々木 ええ、ユーモア全集がね。一〇月に講談社から  
第二回目が出るので、私にちょっと……中に挟んである  
小さな、月々のあれがあるでしょう。あれに「何か書い  
てくれ」と言われて書いてしまったのですが、その中に  
も書いてあります。

それで、兄はやはり青山学院に行こうと思って、その  
時分は三田に下宿していたのですけれども、慶應のほう  
からずっと青山まで歩いたのですね。麻布を通って青山  
へという。電車賃がないから、まだ貧乏だったから。

そして、途中で明治学院の白金へ出たのです。それで  
明治学院の前に出たとき、ちょうど雨も降ってきたし、  
ひよっと思いついたら明治学院の前だった。「これは青  
山学院と同じだ」と。非常に親しかったのです、青山と  
明治学院はね。

学生時代でも始終、両方でいろいろと事があるたびに  
院長さんが来て、お互いに祝辞などを述べていました。  
井深〔梶之助〕先生<sup>(9)</sup>、片方は本多〔庸一〕先生<sup>(10)</sup>。だ  
から〔青山学院で〕本多先生と同じように、井深先生に  
も話を聞いているから、「これは同じだ」と思ったので

す。それは、だいたいそうですけれどもね。

青山学院に行くよりも、このままで「じゃあ、ここへ入って聞いてみよう」と思ってね、今の明治学院の門のところからこう上がっていくと、ちょうど井深先生が……あそこは坂になってるので、下りて来るのです。それで、すぐに先生のところへ行って「先生」と言って、自分の話をして「こういう訳ですから、私を明治学院に入れてくれないか」と。(笑)。

そうしたら、井深先生が親切に「そうか、それじゃ何とかしてやろう。こっちに來たまえ」と言って事務所に連れていったのです。そして、事務所で学生部の主任の人に「これを入れてやってくれ」と言って頼んでね。そして、井深さんは用事があって出ていった。その、院長が言うわけですから、すぐに入れるという……。そして「君は慶應で何年になるのか」と。慶應の予科二年だったのです。あの時は明治学院と青山学院は専門科、高等科。「では、高等科の二年に入れてやろう」という話になるのです。(笑)。

そういうことで、兄はキリスト教を家で一番初めに知っているのです。

私どもが大阪にいる時分、兄は慶應にいました。彼は青山学院を出てから、慶應へ行くとすぐに、今の普連土学園<sup>⑥</sup>、あれは慶應のそばですか、そこが創った普連土教

会に行っていました。

そして、兄が大阪に遊びに来て「お前達も教会へ行け」と、兄が教会へ入れたのです。私たちは桃山に行くようになってからも、まだ教会へ行かなかったのですが、兄が二番目の兄と私を連れて、家からあまり遠くないところにメソジストの教会があったので、そこに行きました。夏休みに兄が我々を連れて教会へ行きました。

すると間もなく、私のいる町の向こうの端のほう、私のところが二丁目ですが、一丁目のところに新しい教会ができた。訳が分からないから、教会ならどこでもいいのですね。(笑)そこが、行くのに近いものですから、そこが開かれたときに行ったら、何とそこが聖公会だったのです。

我々は聖公会でもメソジストでも何でもない。しかし、家のそばでしたからね。それからそちらの聖公会に行きました。このあいだ亡くなった柳原「貞次郎」先生<sup>⑦</sup>がやっていたヨハネ教会ですよ。その牧師さん、これも偉い人でしたが、早川「喜四郎」先生<sup>⑧</sup>です。

——平安女学院<sup>⑨</sup>の？

佐々木 ええ、あの人が牧師さんで、アメリカから帰ってきたところでした。それで、私と兄「二郎」とであそこへ参りまして、あそこで信者になったのです。早川先生にかわいがられて、それからいろいろなことで兄はそ

これから推薦されて、東京の神学校に行きました。卒業してから、あそこの推薦ですから、やはりあの時分、京都教区は大阪と一緒に、卒業すると同時に早川さんの下で伝道師をやっていました。

早川さんにかわいがられて、それから後もいろいろとお世話になりました。それから京都へ行って、そこでも早川さんの下でやっていたのです。そこでずっと……そんなことでキリスト教が入ってきたのです。

—— ああ、そうですね。(笑)。

佐々木 信仰というものは妙なものです。

—— それは、中学生の頃ですか。

佐々木 私が中学生の頃です。中学校の一、二年ですね。それから沼津へ帰りましたけれども、もう今度はちゃんと分かっていますから、聖公会に行きました。

東京ではまた都合のいいことに、私の京都の兄(二郎)が神学生時代、神田の諸聖徒教会へ行っていたのです。タッカーさん<sup>(10)</sup>が創った教会で、須貝さんと私の兄とが神学院の生徒で、日曜、日曜に行って働いていたのです。だから、もう東京に来るとすぐに諸聖徒教会、タッカーさんの教会へ行きました。のちには須貝さん<sup>(11)</sup>達とも一緒にになりました。それからあとは、どこへ行っても聖公会へという……。

## 立教を迎えられるまで

—— ああ、そうですね。先生が東大のときに、何かご専門になさったことがおありだと伺いましたが？

佐々木 いや、特別に専門はやっていません。普通の英文学をやっていたのです。ただ卒業してから、自分の専門というのではないけれども、やはり英文学ですから、キリスト教が非常に関係しています。だから、特にキリスト教に関係のあるような……英文学の中にそういう方面がありますから、そちらのほうを勉強したいと思っているうちに……日本の人は、英文学をやっている割に教会のことを知らないですね。

だから、同じ教会でも、英国聖公会というものは非常に英文学の上で必要なのです。しかし、みんな、そんなことは没却して有名な文筆物などを読んでいたのです。私は「そんなことをやっても大変だ。誰もやっていないような祈禱書をいじってみよう」と思ったのです。ことに祈禱書を中心としても、一般の英文学をやっている人が知らなければならぬ教会の暦、暦年を誰も知らない。知らないでやっているわけです。

ただ「クリスマス」ということだけ分かっているだけで、もっと小さな事柄ですね。ところが、それに従ってイギリスの社会や日常生活が動いているでしょう。それ

を知らないで「Holy Week」とか何とかと書いてある。英文学の先生といっても、その時分は知らないのです。字引には「Holy Week」と書いてある。そして「復活日の前である」といったことが書いてある。内容のもっと細かなことや、それについてのいろいろなことは、もっとも分からないわけです。それを調べたいと思いました。そちらは後に留学してから、主にそういった本を集めました。そして、それをいろいろと、一応「教会暦」ということで日本人に分かるように書いて、聖公会の出版社から出したのです（一九三九年刊『教会暦年の研究』）。それが非常に評判が良くて、あちこちで珍重がられました。そちらは誰もやらなかったことを私が始めたわけです。今の英文学にしても、あまり信仰的な内容はなくて、一応しか知らないの、それを専門にしたという感じです。

—— そのときは、どこかにお勤めになっていらしたのですか。

佐々木 ええ。その頃、私は大学を出てから、一番初めに会津中学校というところに行きました。面白いことに、会津中学校のそのときの校長先生は、私が沼津の中学校へ入ったときの校長先生でした。私が卒業したら、突然、東京へやってきて「ちょっと来い」というわけです。校長先生は偉いので「何だろう」と……何も私は知らなかつ

たのですが「今度、おれのほうにちようど先生の空があるから、お前、来い」と、まるで命令ですね。（笑）。それで仕方がなくて、子供のときから習っている先生ですから「行きましょう」と。そうしたら、先生が「もう一人ある。友達を連れてこい」というわけです。それで、一緒に卒業したのが遊んでいるから「二人で行こう」ということで、会津中学へ行きました。

そこで兵隊に取られてしまつて、兵隊に入りました。一年ばかり教えて兵隊に行つてしまつて、兵隊が終わると、もう会津中学校は辞めてしましました。

ちようど都合が良かったことに、私の一番上の兄が六高（岡山）の教授を七、八年していたのですが、やはり東京にいたほうが都合がいいのですね、先生をしていても仕事は。しかし東京でも、官立はなかなか口がない。慶應では、英語ができると知っていたので、今度は慶應の教授になったのです。

—— ああ、そうですか。

佐々木 そのとき、ちようど私は兵隊が終わつて、また何か仕事に就かなければならなかったのです。兄がなかなか強引で、六高の校長に、自分が東京に行きたいから……向こうも止めたのでしょうかね、「いや、なかなか後がないから」とか言つたのでしょうか。すると、兄が「後任は立派なのがいいます。僕の弟です」と言つて（笑）。

私は首席で出たのです。首席といっても二五、二六にもなって、たいしたことはないのですけれども、一応は首席です。「東大の英文科を首席で出ている。だから、これを選んでください」と。

そうしたら、またその校長さんが、すごくいいことに法学士で自分も兵隊をやったことがある。日露戦争にも出た人。陸軍大尉で兵隊出身という人だったのです。だから、兵隊に行ったということは大変いいと思っている。兵隊に行っているから勉強しなかったなどということは気が付かないから。で、乗り気になって、私に会いもしないで兄と直接交渉。それで私は六高へ行ったわけです。(笑)。

そして、六高にしばらくいて、それから八高(名古屋)へ。八高から静岡高等学校、それから一高(東京)、そこで教頭まで行ったのです。もう、それから上は校長です。すると戦争中、七年制の東京の都立高の校長がよそに行ったので、そこへ行かないかと言われて、行きました。戦争中はそこでずっとやっていましたね。

それが終わると、今度は「戦後」立教で問題が起こってしまっ、(総長が)追い出されてしまった。(笑)。それで、私が聖公会の信者だったことを知っているから、内々で話も出たらしいですね。私はそのとき「嫌だ」と。でもそのうちに、東大の南原さん<sup>(12)</sup>から私に電報が来た

のです。「相談したいことがあるから来てくれ」。何だろうと思って行ったら、「君、立教の総長にならないか」と。「君を松崎さん<sup>(13)</sup>に推薦した」と言いましたね。

松崎さんが「誰かいけないか」と「南原さんに」頼んだ。それはつまり、私が前に内々で断った。松崎さんは人がいないから「南原氏の所に」行ったのです。すると、また図らずも南原さんが私を推薦してしまったのです。(笑)。

南原さんに呼び出されたりしまして、私はすぐ断ってきたのです。南原さんは仕方ないからまた理事長と相談したのですね。また南原さんに呼び出されてね。南原さんがなかなかうまくいことを言って「大学は私立も官立もないんだ。新しい時代だから、僕もこうやっているんだ。一緒になって日本のために尽くそうじゃないか」というわけです。(笑)。

それでも私は断っていました。

そうしたら、それから二、三日たって須貝主教が来たのです。須貝さんは、私があそこの信者ですから、かわいがってもらっていました。須貝さんが来て「立教はうるさい所だから、君をあんな所にやって苦しめようと思わない。だから、できるだけそういうことは僕からはお願いしないと思っていんだけど、どうしても人がいない。だから、来てくれ」と。

そこで私も、これだけいろいろな人が来て、最後に須貝さんから言われて。これは自分の恩人ですよね。「やりましょう」という気になって、そこで決心が付いて、それから南原さんのところに、また行ったのです、「引き受けましょう」と。それから、また南原さんを通して公になって、理事長のところへ。すると、理事長がすぐやってきましたよ。前の、私がいた所へ。私があそこ〔校宅〕へいたでしょう。

—— 神学院グラウンドの所にあった。

佐々木 あれは大変都合がよくて。私は立教に何も関係のない一高の教授をしているときに、須貝さんの教会に出ているでしょう。須貝さんは神学院院长で、あの家に入っていたのです。そして、戦争が始まりそうだというので外人が〔母国に〕帰ったあとに、須貝さんは西洋館のほうに移って、あそこが空いたのです。

私も一高で学生主事をやっていて、それは官舎があったのですけれども、教頭になったら、教頭は官舎がないのです。すると須貝さんが「あそこを貸してやるから」ということで、あそこへ入ったのです。

それで、そのまま立教の総長になって、それまで家賃を払っていたのが、総長になったら家賃免除になった。

（笑）。

—— それが二十何年でございますか。

佐々木 二一年。戦争が終わった翌年です。それでだんだんと深入りしてしまつて。

—— その前は須藤……。

佐々木 須藤さん<sup>(14)</sup>がやっていました。

—— 確かそうでしたね。

佐々木

代理としてね。  
はい。そういうことでございますか。

### 「立教再建」とは

佐々木 それはね、私はやはり大事なことがあるのです。『立教小学校十年史』というものがありますよ。

—— はい、ございますね。

佐々木 あそこに私は今のいきさつ、立教に來たいきさつを書いていきます。

—— ああ、そうですか。

佐々木 そして、小学校を創ったということです。まず本當に立教的になるためには……〔戦時中のあり方が〕「立教的でない」というので、〔戦後に〕問題が勃発しましたからね。もう一度ちゃんとしたものを……。

あの時分、金も何もないときだったから、すぐにはどうすることもできないし、学校も新しくいろいろなことを作る。新しい大学などできている時代ですからね。小学校から始めるといふ……やはり小学校を創らないと、



形の上で小学校からずっと大学までなければいけないという感じがしたのです。

慶應がそうですね。やはり、あそこ〔幼稚園⇨小学校〕で慶應魂というものができるんですね。だから、数は少なくても、そういう筋だけは作りたい。私はそう思ったのです。すると、松崎さんも賛成なのですね。慶應のようにやってしまえと。立教が揺らいでしまったのだから、ちゃんとしたものを作らなければならぬ。それでやったのです。私は「まずそこから行きましょう」と。松崎さんも非常に賛成で、彼もそう言いました。

けれども、いろいろな問題がありました。戦争ののち、GHQからは「reconstruction（再建）しろ」、「元通りに直せというのが命令でした。それで、みんな適当にそれを解釈するわけです。私は「作り直す」とは、そういう意味だと思って、やったのですが、ところが、西洋人はそうではないのですね。今でもいますけれども、ポール・ラッシュ<sup>(15)</sup>は非常によくやってくれましたが、理屈は「私は不賛成だ」と言うのです。「小学校創設は」reconstructionではない。よけいなことを作るな」と。（笑）。それからもう一つ、理科専門学校。これも戦争中あったものではないから「それは破棄しろ」と。

——「元通りにしろ」ということですか。（笑）。

佐々木 ええ、そうですね。文字通りね。だから、あ

あいうことは威張ってやるものですよ。すると、ラッシュというのはいい男で、理屈はそうでも、やり始めると一生懸命やってくれる。それで小学校をつくり出したら、初めはぐずったけれども、非常に世話して助けてくれました。だから、人によっては「小学校はラッシュが創った」などと言う人もあるぐらいです。（笑）。

始まったら、しじゅう来て子供をかわいがっていました。あの人は威張ったけれども、世話もしてくれましたね。だから、彼は立教の恩人ですよ。あとはそういった意味で、アメリカの「立教を元通りにしろ」「ミッシェンの思う通りにしろ」というようなふうが、非常にありましてね。それは私がやっているあいだ、いろいろ問題を起こしました。

向こうでは、もういっぺん引き取ったでしょう。立教を元通りにという。だから、西洋人がいるけれども、その西洋人たちに実権を握らせようと。もとはそうだったのでしょうか？

—— ええ、そうでございますね。

佐々木 だから、向こうにそういった態度がずいぶん出てきましたね。しかし、幸いラッシュとかブランチャ<sup>(16)</sup>とか、ああいった人は学校で役目に就こうという気はないのです。だから、我々にとっては大変よかったのですが、向こうから、新たにいろいろな人を送ってくる。

みんな、何か偉いものになると思ってるのです。

それで、一番困ったのは、あまり大事にしなかったの  
で、私が怒って言ったのですが、「支那人の合いの子」  
ですよ。立派な人でしたが。支那の上海か何かの聖公会  
の大学のディーン〔学部長〕をしていて、戦争が終わっ  
てまた来たのです。つまりその人に「何かやらせる」と  
いうわけです。それは偉いわけですから。それを少なく  
とも学部長か何かにしたというのがアメリカの聖公会  
の考えでしたが、私は最後までしなかったのです。

それも、その人はそういう人だから、自分もそういっ  
たことを口に出すのですね。その当時一万ドルでしたか、  
くれるようになりました。一万ドルという大変な金です。  
「だから、アメリカの言うことを聞け」というようなこ  
とを言う。私はそういうやつが大嫌いで「君、本当に立  
教の事を思うなら」と……「ラッシュは今、表に出ず  
に、ブランちゃんは何も余計なことをしないで、一生懸  
命教えているじゃないか」と。

他の若い者が来ても、みんな何かやりたがるのですね。  
初めは心理学か何か教えました。でも、面白くないの  
ですね。とうとう、やめてしまいました。結局は支那へ  
行って、またあちらの大学のディーンか何かになりまし  
た。ああいうのは一番、嫌でしたね。力をもって押さえ  
てくるのです。だいたい自分の注文をしてね。

セイヤーさん<sup>(7)</sup>という人がいましたね。君はいたかな？  
—— いえ、その頃は知りません。

佐々木 あれがまた向こうから来て、ずいぶん日本の世  
話を焼きましたね。いろいろな世話を焼いてくれました。  
立教に対していろいろな注文をして。いい人でしたよ、  
外交官で。セイヤーさんとさんざんやり合いました。セ  
イヤーさんの言うことはあまり聞かなかったけれども。  
向こうの通りにやらせようとするのですね。

それで面白いことに、やはり西洋人は日本の東大は、  
ばかに尊敬するのです。「日本には東大のようないいの  
があるじゃないか。あれがあるから、お前達はあんなに  
良くならなくてもいい」と、そういうことを言うのです。  
こちらは小さな学校で「必須教育だけやれ」と。

まあ、向こうから見れば、そうなのですな。「学術的  
な、学問的な学校というのは東大があるじゃないか」  
「そんなものにはとてもなれないのだから、小さなミッ  
ション・スクールで信仰をやっていればいい」と、昔の  
ことを言っている。

しかし、それはない。「今ではそんなことを言ってい  
てはだめだ。日本の事情は変わってきた」と言っても、  
なかなか分からないのです。

セイヤーさんなども、やはりそう言うのですね。「日  
本には東大があるから、東大のまねをしなくてもいい」

と。「まねじゃないんだ。我々は……」と。

それから、信仰の問題があります。ああいった人は面白くて、セイヤーさんも、「学問のほうもやらなきゃならん」と言う。「いや、それはまあそれでいい」と。しかし、信仰の問題、教会、「そのほうの進歩がなければ、だめじゃないか」と。それから、調べていると、そんなに悪くないのです。統計や表で出すと、大変いい格好になるのです。

——それは数でございすか。

佐々木 ええ、数で。それを研究してね。つまり数というより割合、パーセンテージです。いろいろ考えてみると、一番初めに学生が入るでしょう。そのときの信者の数は分かりますね。それから、全体の数。まあ、一年間に少しは増えもしますけれども、たいして増えない。二年、三年になると、かえってやめるのです。

ところが、初めから信者の家の子供とか、信者関係の人は「学校を」やめない。だから、「信者の」割合は増えるわけです。一〇〇人に対するパーセンテージは、一年級るときには例えば一〇％しかない。二年級になるとき、できない人がやめたり、それから、だめな人がやめたり、それが八〇人ぐらいになります。しかし、元から一〇人は信者なのです。

パーセンテージをずっと出して、ちゃんと表に書いて、

四年になると、初めるときは一〇％ぐらいの信者の数が、卒業するときはもう二〇％になる。必ずなるのです。それを見せると、喜んじゃってですね。そういったところが分からないのですね。そのような表を作ると、大変喜んで「これはアメリカよりいい」という話になって、しまいには毎年、「統計表を」請求するのです。アメリカに持って行って「アメリカよりはいい」と言ってます。(笑)。そんなものでね。本当に教育に親しんでやっている人と、行政で、そういった「表」でやっている人とは、まるで違うのです。日本でもそうですが、本当の学校の教育ができていくかどうかというのは、違うのです。しまいにはセイヤーさんもすっかり……ごまかした訳ではなく、ちゃんとそうなるのです。面白かったですよ。セイヤーさんは喜んじゃって「今年はまだできないのか」と。当時は足立君(省一郎、当時大学学生部職員)を使って、その表を作らせていました。

いや、学校なんてものは、やはりいろいろな上辺だけのことでだめですね。だから、やはり本当に学校というものは、立派にやるかどうかということは……今はまたいろいろと、学生のほうが逆に「表」でもって先生に対してやってくるような時代になりましたが、これも本当の学校らしい学校ではないですね。そういった点もちょっと我々には分かりませんね。

—— 先生は、そのときは小学校の校長もなさっていたのですね。

佐々木 そうです。そのとき、別々にしようと思ったけれども、やはりあの当時、みんな心配してしまつて。そのようにすると学校の統一がとれなくなるというか、私が「別にしよう」と申し出ても、させないのです。

—— その頃、学院長はどうなっていたのですか。先生が学院長ですか。

佐々木 ええ、学院長でした。

—— 学院長であり、小学校校長であり、中学校校長であり、大学総長であるということですか。

佐々木 そうです、全て兼ねていました。ところが、あの時は初めのうち、学院長はなかったのです。ライフ・スナイダーさん<sup>(18)</sup>が「学院」総長であるけれども、学院長ですよ。総理だから学院長です。ところが、あの方がいなくなつてしまつたから、総理「学院総長」がなくなつてしまつた……いや、そうではなく、誰かが総理になつたのですね。遠山「郁三」さん<sup>(19)</sup>がなったのかな。

—— 遠山先生は院長をなさっていましたでしょうか。

佐々木 ええ、彼がなつたのです。「実際は「学院総長」

ああ、そうですね。

佐々木 ええ、最後に。とても長かつたですね。結局、また遠山さんが辞めたあとは「総理」「院長」とは言わ

なかつたですね。私は立教大学総長をやつて、総長兼何々……総長、中学校長がみんな兼ではないのですね、「総長・中学校長」で。それで一人、院長ということ。しかし、ちょうどあれが改正になったのですかね、新しい学校制度になつて、そのときにきちんと院長制にして、院長という名前も付けました。

—— 先生の頃は、まだ社団法人だったのですか。

佐々木 財団法人です。

—— ああ、財団法人だったのですね。

佐々木 それを私がいるときに、早急に学校法人にしなければならなくなつたのです。私がちょうど一期四年間「一九四六―四九年度」やつて、その頃、新しい学校法人制度ができました。そこで立教を学校法人に直したのです。そのとき、今のうちにちゃんと院長……今の通りになつたのです。前に西洋人がやつてきた頃のようですね。それを作るのに一年掛かりました。ちょうど私が、二学期が終わつたときに始まつたのかな、二三年頃……。大学の……あのときは学院のほうで出した人ではなかつたかな。大学が主になつて作りました。佐藤君が庶務課長でした。佐藤君と一緒に、庶務にいた岸本君がいろいろなことを知つていて、あの二人で主に作つたでしょう。そして、いくらか村田「一也」君あたりにも参加してもらつて一年掛かつて作つたのです。新しい役員は前

の役員がそのままずっとしてきました。だから、私はそのままずっとだったのです。初めの四年（一九四六～四九年度）をやって、それから一年間（一九五〇年度）、〔学校法人を〕作っているあいだは、つまり元の財団法人ですね。だから、〔学校法人は〕五年掛かってきましたね。それから四年間（一九五一～五四年度）ということになります。だから、私は四年―四年ではなく、四年と一年が続いて、それからまた四年やったから、九年やっているのです。

—— ああ、そうですね。いわゆる学校法人に移る際の寄附行為の第一条でございますね。あれの「キリスト教に基づく」という言葉が出てきたいきさつなどを、ちょっと聞かせただけだと思うのですが。

佐々木 あれはね……。

—— 「キリスト教主義にまね」とかいうことでしたね、初めは？

佐々木 そうですね。戦争中、みんなああいうふうに流したのですね。「キリスト教に基づく」などというのは、戦争中はキリスト教はいけないのですから。だから「キリスト教の主義にまね」なら、キリスト教をやるのではないからと。そのように弱めたのですね。

あの当時、みんな一応そういうような格好にして「キリスト教を教える」ということは言わないようにしたの

です。すると、今度、新しい時代になると、我も我も「キリスト教を教える」と言ったほうがいいという……。

—— ああ、なるほど。

佐々木 それで、みんな変えてしまった。

—— 将来のビジョンとか何とかということまでは、あまりお考えにならなかったということですか。

佐々木 そうですね。

—— どのような学校にしていくなかという……。

佐々木 いや、それはもう初めから同じなのです。アメリカから来たときから。やはりキリスト教を教えて、そして同時に教養を教えるということです。だから、大きく言えばキリスト教的にもなるでしょう。それから、もっとしっかり言えば、キリスト教に基づいた、キリスト教を教えたかったというようになりますね。

これはやはりキリスト教とは離せないですね。それから、あとはいろいろな学問をやる。例えば初めのあいだは、キリスト教を言わなければならぬ時代になった。共産主義というようなもの、キリスト教を否定するとか、先生でそのような人を追い出すとか、それくらいの勢いでやっていましたね。

しかし、それはなかなかできなくてね。一人、二人、それで追い出しましたけれども。そんなことを言っていると、みんなそういうふうな……その辺の人が多く

なってきましたね、それで、やりかけて失敗したことがあります。

——とにかく立教としては、キリスト教を教えるということが眼目であつたわけですね。

佐々木 眼目です。そうですよ。これからの時代もそうでしょう、全体の方針は。

——今はあまり教えなくなっていましたね。  
(笑)。

佐々木 いや、実際において教えないのですよ。やらな  
いから。

——ああ、そうですか。

佐々木 だから、戦争のときなど、いわゆるクリスチャンであつた湯川秀樹先生でも、教室でキリスト教の悪口を言ってみたり、よけいなことをしているのです。だから、そういうクリスチャンだつていて、非キリスト教的な行動をやっていたのです。だから……。

——ページになって。

佐々木 パージになつてしまったのです。だから、あの当時はしばらく、残っていた者が何時ページになるかと、みんな心配していたのです。それでも、また熱心にキリスト教の提灯を守ってくれましたね。そういうのがまた熱心になっているし。

——そうですね。

佐々木 人間はああいったときに、いろいろなことが起こってくるのですね。

## G H Qと学内の政治運動

——先生が総長をなさっていたとき、何かだいが学生が事件を起こして大変だったということを伺ったのですが。何か規約問題か何かでもめたことがございますか、学生会か何かの問題で？

佐々木 ええ。それはあまり規約を作るとか……とにかく私が行つてから……、これは、一番初めは西村先生。西村……。

——敬太郎。

佐々木 西村敬太郎先生<sup>(20)</sup>。彼がチャプレンでしたね。

——はい。

佐々木 あの人の排斥。これが一つ、問題としたわけです。それはあの時分G H Qは……まあ、アメリカに反対するような立場、そういうことをした人、戦争のために尽くしたことは、どんどん投書しろと。そうしたら、それはみんなパージしなければならぬ。それでずいぶん投書が行つて、いろいろな人がパージされたのです。

私はそれまで官立学校の校長をしていました。官立学校の校長のときも、一生懸命やっていた連中がみんな投書されて、ページになったのです。立教でも、いろいろ

な人達がページになったでしょう。

—— そうですね。

佐々木 何も言わなくても、投書がなくても。西村君は何でもなくて、そうしたら、西村君が戦争中「鬼畜米英」というようなことを書いたと。くだらない。それは誰だっ  
て書いたことはあるのです。

—— そうですね。

佐々木 それを「材料は取ってある」というのです。それは誰がどこから探してきたのか……それを学生達の左翼ですが、届けたのです。それが立教で、また、誰がやったか分からない。学生がやったか、誰がやったか分からないけれども、それで、あれを調べるあれができて、西村君がそれに引っ掛かったのです。それで、向こうに取り上げられたでしょう。

そうしたら、一番初めに学生が騒ぎ出したのです。もう左翼がかったやつらです。どちらかといえば、運動部と反対側の委員長ですね。…それが騒ぎ立てて、相当、張り紙などして「西村はあれししている」とか。こんなひどいことを書いた文章を掲示して、ワイワイ、ワイワイ、この中で騒ぎをやってね、ちょっとストライキのようになったのです。

そこで私は「それは仕方がない」と。取り上げられたことは仕方がない。けれども、そこで調べるのですから

ね。まだその調べがつかないうちにこういう騒動は、偽物の騒動はと、学校から追い出した。「これはとんでもないことだ」と。ページが決まってもいないときに、そういう人の勝手な……。私はその学生を処罰した。無期停学にしたのです。それで、三人だか無期停学にしましたね。

それで、そのときは結局、収まりました。一般の学生はまだ付いてきたから。そういう連中だけで、今のよう  
に付いていかなかった。運動部の連中なども付いてい  
なかった。それで処罰したわけです。

ところが、向こうは手を回してね。それは、教員の中にもそういうのがいたのでしょうね。GHQのほうへ手を回して「立教ではそういうふう  
に、ちゃんと悪い先生を追いつせ」という命令を出したのに対して、それに  
応えてきた」とか「その生徒を処罰した」とか。「こ  
れは方針に反する。だから早く取り消せ」というわけ  
です。

また、これは面白いことに、文部省から「GHQから  
そういうあれがありましたから、その学生（処罰）を早  
く取り消してくれ」と。それで一日おきぐらいに文部省  
から言ってくるのです。それから、そのときは秦君（二  
郎、当時大学総務部長・会計課長）が、「文部省という  
ところは、分からないのですよ」。

—— 事情がね、はい。

佐々木 向こうから言われると「誰が言っているのか?」「GHQが」と言うのと「GHQの小使が言っているんだ」と。(笑) そんなものですね。

そこで、ラッシュに聞いてみたのです。ラッシュと、それから今、図書館に行っている……名譽図書館長になっている……。それを聞いてみたら「そんなことは心配するな」と。GHQの学校局長のほうへ話しておく、と。それで聞いてあったから、私は文部省の言うことを聞かなかったのです。それはおかしいのですけれども、知っているのですから。

それから面白い話ですが、私は文部省のことも知っているけれども、文部省だって、よく「これは文部省の命令です」などといって、文部省の下っ端のやつが言ってくるのです。「本省では、こう言っている」と。それと同じことなのです。

そして、GHQ「に行く」と、局長が奥のほうにいますが、その局長の部屋の入り口に、日本の女の人がいるのです。私が行くとすぐに、あまり肩幅の大きくない若い西洋人が一人出てきて「お前、佐々木か。お前、けしからんじゃないか」と。「GHQの命令で出したことに對して、協力している者を退学させるとは何事か。取り消せ」と。

それは局長ではないことが分かっているので、私も「それとこれとは違う。これは先生を無視した学生の騒動で、その問題とは違うんだ」「先生がまだそういう、何というか決まらないうちに、先生の人格を傷付けたので、教育的にやった」と言っていたのです。(笑)。

そうしてやっているうちに、その時間になったので局長が待っていたのでしようね。ちょっと見たのでしよう。そうしたら私がやり合っているでしよう。すると、出てきて「あ、佐々木さんですか」「佐々木です」「こっちへ来て話を」と。それで、そこでそのままになってしまった。そして、行つて一応、話すと、もうよく了解しているのです。「それはそれでいいです」「じゃあ、もうこちらには問題ないから」ということで帰ってきたわけです。ところが、アメリカの領事、それがやってきたのです。すると、同時にそこも兼ねてやっていたアメリカの領事だったのですが、私のところへ来て非常に憤慨して、あとで地団駄を踏んで怒っていたと。(笑)「佐々木を呼べ」と。それをあそこにした女の子が聞いていて、私に話してくれました。今更騒いだって。そういう面白いことがありました。

しかし、それはそれで、だから、文部省から言われたことに踊らされると負けてしまう。何事もそうです。それから、それは学年末までずいぶん長いあいだ停学して



いましたね。卒業するときは遅れないで済んだと思うけれども、とにかく三人ね。その問題はそれで片付きました。これは一時、騒ぎましたね。

結局、それでお辞めになったわけですか。

佐々木 誰？

西村先生は？

佐々木 そうです。それで出たのですから、あとから。

あ、GHQから？

佐々木 GHQからの。これは仕方がないですね。

ああ、そうですね。では、学生に辞めさせられたというわけではないのですね。

佐々木 そうではないのです。それは学生がそんなことをする資格も何もないので、だから私は怒ったのです。

それが出てしまえば、これは「出たから」と、まだいくらか理屈がある。そんなことが決まらないうちに学生が、しかも先生に対する無礼な言葉を使うなどというのは許せないということで、私はそれで処罰したわけです。教育的なもので。それが一つの問題です。

その次が、やはりそれに根を発しているのですね。学生の中の運動部と、そういった左翼との対立がまた起こってきたのです。そこで、校友会（学生会）の規則を改正かな、何とかして私、校友会（学生会）を壊そうとしたのです。そのときは両方ともいろいろ……これは少し違

うけれども、お互いに考えがあって、やり合いましたが、やはり運動部のほうが多かったのです。大会をみんなでやりましたね。運動部のいろいろな……「運動を独占しちゃいかん」とか何とか、いろいろありましたね。とにかく運動をじゃましている連中です。だから、運動もみんながやる。運動選手とか運動部というものを否定するやり方ですね。

それでも、そのときは中川（一郎）君<sup>(2)</sup>がいて、これが運動部の部長です。これが熱心で、よくやるのです。あれがまあ、これもまた乱暴だね。（笑）。それに小笠原君とか、いろいろと付いていましてね。それで大会をやつて、やはり数でも勝ってしまつて、それから当分は運動がどんどん栄えてきましたね。

あのときに下手をすると、運動部の全体が壊された。中川が大将で、これは乱暴なことをするのです。これはこんなことがなかったら大変だったなと。（笑）。

—— 学生会の規約問題ですか。

佐々木 ええ、そうですね。これはやはり今度は投票で堂々とやって、一回か二回やりました。これで勝ってしまった、それからもうそのままになって、今度は運動部が盛んになりました。中川はああいうことをやるのが非常に上手だね。まあ、学生で問題が残ったのは、それが主ですね。

それから、今度は理学部の理専の廃止の問題です。理専の学生がいろいろ心配して、これもいろいろなことをやって騒ぎました。これは大学ができたら、大学にしてやるということで、これも一応、文句を言ったけれども収まりました。あとは特に困ったことはありませんね。

—— ああ、そうでございますか。

佐々木 先生の問題でも、ときどきありましたがね。左翼の先生を辞めさせようと思って、あまり学内の熱心なクリスチャンの先生が左翼になって……というから。今は辞めましたけれども、あの有名な、いい人だったけれども、宮川〔實、当時経済学部教授〕という人です。あれは利口な人ですね。

—— ええ。

佐々木 そういった意味では、宮川さんもまたそうでした。これはクリスチャンの連中が。それで「宮川を辞めさせよう」と、部長会議などで。それから経済学部の河西〔太一郎〕君も「いや、宮川君を僕は止めます」と、言っただけで。そうしたら河西君は見当違いしたのですね。宮川もなかなか話のうまい人ですから「学校で僕を嫌いなのは……」と言ったでしょう。すると、河西君は人がいいから「じゃあ……」と。すると、宮川さんは辞めないのです。

そして、経済学部の教授などがそろって話したのです

が、だいたい、あれにかぶれた人がいましたからね、教授会でなかなかこんなことは言えないと。

それから、うちで教授会に出て「宮川先生、こんなことはしないでくれ」と、表から来ている、今、法政の総長をしている……。

—— 中村〔哲〕。

佐々木 あれ、偉い人ですよ……中村か。あの人は講師で来ていたのです。客員教授かな。

そして、いろいろな人が……私の親しくしている人も、このときこちらの教授になって、今は東大教授をもう辞めましたけれども、ドイツの日本文化協会の何かした人ですね、経済学の有名な人です。あれは……松田〔智雄〕君。この人は非常にいい人でした。立派なクリスチャンで。穏やかな人で。「あまり無理しないほうがいいんじゃないですか」と私に言うものですから、そのままにしておいて、特別悪いことでは捕まっていけないので、そのままにしてしまったのです。あまりよいことをしなかった。(笑)。

—— 我々の頃は、宮川さんというと、やはり看板教授でしたね。

佐々木 面白いらしいですね。

—— はい。

佐々木 しかし、やはり宮川君は、そういった点では左

翼でしたね。

—— はい、それはそうですね。(笑)。

佐々木 のちに理専をやめて理学部を創ろうとしたのだけれども、理専のうちから残して先生にした人と、そのまま来たという人がいるのです。助教授で、左翼のことばかりやって育ったという人は、入れないことにしたのです。すると「それは組合を圧迫する」と。

—— ああ、なるほど。

佐々木 そういう理屈を付けて、そして、ああいった会議がありますね。あれに訴えたのです。それで、組合をやっている学力が足りない。助教授でしたからね。だから、新しく創るのだから、学校としては認められない。それで、うちのほうでもそれにしましたよ。行くと、資本家が……。 (笑)。私らは資本家とは何も思っていないけど、もう資本家が来ましたという……。おかしい雰囲気になってしまっているのです。(笑)。それで向き合ってお互いに証人を連れていって。すると、その連中が「学校からこの人を連れて来てください」と言っている。

—— 宮川さん？

佐々木 宮川君。すると、彼はなかなか……学校で会うときはお世辞を言って、また向こう側の……。

—— そうでしょうね。

佐々木 「学校の学問の会議じゃない」「組合だ」といっ

たことをやり合っている。そのときの裁判をするのが、東京大学の、体の小さい、何と言う人だったかな、有名な人が来た。大先生です。それがその頃の委員長です。ただ、先生は分かっているのですね、学校のことだからね。やはり学問ができない。だから、学校の考えではなくて、それにかこつけてやっているのだらうと気付いているのです。けれども、先生がそこに立っていて、ちゃんと、これはやはり学校の問題と、学校の創るときですからね。それで、学力は問題になってくる。この問題ではないということですね。だから、ここではそのようにものを考えないと。結局、学校……それで無事に済みましたね。

—— ああ、そうですね。

佐々木 そのときも、ずいぶん行きましたよ。そのときの……最後にあそこに入っている事務所は、私が……。

—— 労働監督局とか何とかいうところですね。

佐々木 ええ、……一年間に二回、あれをして、学校の停学を食らわした、それがそこで事務員で。

—— ああ、そうですね。(笑)。

佐々木 事務員だから、それは何も言わなかったけれども……便宜を図ったのだらうけれども、どちらにも……面白かったですよ。やはりこれはこういうことで「専門家だな」と思いました。そういったつまらないことが、たくさんありました。

そうでございますか。

佐々木

まあ、小さなことはときどきありました。

したか。

先生はどのような学校になさりたいと思われま

佐々木

そんなに偉いあれも持っていなかったから。

(笑)。

先ほどは、キリスト教を教えるということが建前になっているということでしたが、それだけではなかったかと思えますけれども？

佐々木 とにかく学校というものは、それほど「こんなふう」に「あんなふう」にモデルを創って、そのままに行くものではなく、そういった根本的な部分が行われている限りは、いろいろな形になっていくのではないでしょう。

当然、イギリスあたりと同じ考えであって、オックスフォードとケンブリッジと、同じ趣旨であっても、やはり学校そのものの空気はずいぶん違いますからね。オックスフォードなどに行くと、いかにも昔風であるけれど、ケンブリッジは明るい感じがしますね。

だから、あまり形づくって、ちゃんとそういうふうなものにするというよりも、教育の芽は生えてきますからね。だから、根本を壊さないようにしたならば、いろいろな形でおのずから立派になっていくと思います。だから、

ら、あまり「こういう学校になればいいな」とか……小学校はいいですけども、大学はね。

で、やはりそういった心持ちを学生が失わないように。

まあ、チャペルを中心としている精神教育というものが、いくらかでも学生、卒業生の中に……何も分からなくても、立教を出たら……。このあいだも、うちのせがれ

〔孫〕が学校を出してもらって、会社へ行ったのです。向こうの入社試験があったのですが、そういったときには何か聞かれるわけです。そのとき、やはり立教出の人として行くときには「立教の中心はここにある」というようなことを実際は味わっていないにかかわらず、一言で言えるようなものを持っていなければならぬ。

「お前、何と言ったの」と聞いたら、もう簡単ですよ。「神と国のために、ということになっていますから、そういう精神です」と。(笑)。それでいいのですね。本当に「神と国のために」だから分らないのですが、「お前のところはどのような方針だったか」「お前はどのような考えでやるか」とか、向こうもちょっと「お前はどのような考えか」と聞くのです。

「立教は神と国のため、小学校から続いてきまして、そのつもりであります」と。(笑)これはもうそれでいいのです。その辺だと思いますね。やはりその根本のところ。これは分かっても、分からなくても、いざとなっ

たら、やはりそれだということが言える程度にしか行かないですね。本当にそれで行く人は幾人かです。一〇人でも二〇人でもいいれば、大変結構。あとの一〇〇人はそれを言えるだけで、立教の卒業生という話題がたくさんあると思います。

—— それだけ知っていれば、やはり何か生きる方針というものが、そこに立つかも分かりませんね。

佐々木 そうです。それを知っていればいいのですよ。だから、やはり自分の学校の校歌などというのは、そういった意味で非常にあれですね。

大切ですね。

佐々木 ええ、精神がちよっと入っている。

### 立教、良い面悪い面

—— 先生が官立から立教へ来られて、何か官立とは違うという点をお感じになりましたでしょうか。

佐々木 それはやはり今のようなところですね。そこに宗教があるということです。私はずいぶん、ずっと官立でやってきましたが、やはり私は最後に立教で働いたことが、一番いい仕事をしたといえますか、自分が本当に心から喜んでやった仕事だと思っています。特別なことはやっていませんが、その空気の中に入っていました。

まあ、一高などは非常に立派な学校ですがね、いろいろ

ろな意味で。これはまた、よその高等学校もたくさんありますが、やはり一高は優れていますね。けれども、あそこはあそこの形があります。あそこの教師であるということ、必ずしも私は誇りとはしません。本当に自分が一生懸命やったと思うのは、やはり立教です。力はなかったけれども。だから、立教で終わったということは、私にとって最大の……だから、それ以外に、もうよその学校へは残っていない。

—— ああ、なるほど。

佐々木 だから、今回、立教を辞めたときにも、すぐ国のほうから、静岡に女子大学があつて「その学長になってくれ」と使いが来たりしましたが、私は断りました。私はそんなこと……最後は立教でやったことが自分の全てだと思っています。非常に熱心で、郷里の新聞に出たりして、あちこちから来ていましたが、すぐ断ってしまつた。

立教で、神と国との教育をしたという立場が最大の名誉です。また、最大の喜びですよ。だから、そのままよその学校へ行つて、よその学長になろうなどということ一度もない。そういったことを言われても断っています。やはり立教の教師、総長として生涯があつて、死んだということが一番大きなものです。

—— 何か立教の良さというのは、何でございましょう

う？

佐々木 そうですね。ただ、立教に願うことは、立教の卒業生も、教職員も、割に偏狭的で「立教だ」「他の人はだめよ」というような……。

—— 排他的な？

佐々木 入れないところがありますね。

ええ、ええ。

佐々木 それをちよっと感じますね。立教出の卒業生が一番官僚的だと。

なるほどね。

佐々木 それはある種類の人だけれども。

はい、それは感じますね。ございます。

佐々木 よその学校に行っても、こんなにお互いにこだわらないですね。よその大学でも、大きいところはそうかもしれないですね。私が経験したところでは、立教出で、その学校の出身である人が非常に排他的である。気が小さい。これは惜しいと思います。だから、立教出で大学の総長になっている人が、あとからあとから出てこない。みんな官立の人がポツと出てくるのです。あれはそうでなくても、立教から放っておいても「その人だ」と。ところがまた、立教出でそういう偉い者になれるような人は、あるときから自分から「おれがそういうふうになる」という気を持っている人になるという。

—— そうですね。(笑)。

佐々木 どうもそういう気を持っている人は、本当の器ではないですね。

—— そうですね。

佐々木 やはり「自分はそんなことを考えていないけれども、みんなのためにやらなきゃならんぞ」と。そうではなくて「いや、おれが出てやりたいんだ」と腹の中で始終、考えて何か行動している、頭のいい人はね……。だから、立教には自負もありますよ。そうでなくても「立教の中で主なところにおれが行かなくちゃ」というような。そこがちよっと寂しい。

まあ、それで現状というものが、きちんとしているからかもしれないけれども。だから、あまり「立教の中の者でなくちゃいかん」というような考え方もいけないですね。そうかといって、誰でもというわけには行かなくて、やはり、できるだけ立教の中の人に働いてもらわなければならぬけれども。また、同時に立教の中にいる人は案外、偏狭というか……。

—— それは官僚的な面がございますね、はい。

佐々木 私はあちこち歩いてきているから、そんな感じはちよっとします。あるいは見方によっては、非常に熱心だと思えます。愛校の精神が強いだけでも。

今度、立教でも百年祭があるけれども、立教の古い教

職員で生きているのは私が一番でしょう。八四歳だから。もとは根岸さんが八八歳だったけれども、今、八四歳というのが一番上ではないですか。私が一番。菅君などはその次ぐらい。

それで「何か書いてくれ」と言ってきたのです、記念にね。私は最年長者でした。何か非常にいいようなあれだけれども、一番ありがたくない名称でした。それは言い換えれば「今度はお前の番だよ」と。(笑) だから、ありがたくないけれども仕方ない。

—— 先生が立教にいらっしゃいまして、一番思い出に残ったことは何でございましょう。

佐々木 覚えていないよ。(笑) やはり何だかんだと、いろいろなことになるからね。みんなそれぞれの思い出があります。とにかく、いわゆるだいたい平和な学校だろうね、いろいろなことがあったにしても。

—— そうでございますね。

佐々木 全くこたわったこともないし、楽しく過ごしましたよ。

—— ああ……。

佐々木 辞めてから、ちょうど十年ぐらい……十一年。そうですね。

### すべては六高の縁から

佐々木 六高を二年かな。面白いことには、私は妙なことに六高が中心になって、ずっと今まで来ているのです。六高には兄の關係で行きました。

—— その六高に三谷隆正<sup>(22)</sup>という人がいたのです。

彼と私は親しいのです。彼が明治学院の中学生で私の兄が高等部のとき、同じ部屋だったのです。私の兄が室長で、三谷君が中学生でした。そして、彼は一高で私より一年上でした。だから、昔から親しかったのです。兄が六高の教授になって行ってから、三谷君が大学を出て、またこれが六高へ行ったのです。私と三谷君はそういう關係で、中学生時代でも、私が東京にいたときに兄が家にいると、遊びに来るのです。そのときに私は三谷君に会った。これまたえらく立派な人ですね。大変偉い人でした。あの時分から、三谷君は東京っ子らしく……東京の人ではないのですけれども、難しいことを知っていました。夏休みに兄のところへ来て、三谷君は難しいことを悠々と言うのです。「東京の人はいろいろ難しいことを知っているんだな」と。(笑)。

私は三谷君の弟分でしたが、私が一高へ入ったとき、三谷君は二年級でした。一高の中で会うと、兄貴分ではなく「近頃、どうですか」「元氣ですか」と言ってくれる

のです。だから、ずっと親しくしていました。

私が兄の後任で六高へ行ったら、三谷君と同僚になったのです。だから、ずっと親しいのです。三谷君の感性というより、むしろ六高ですね。そして、私は六高から静岡高等学校へ、彼は名古屋〔第八高等学校〕へ行ったのです。

名古屋の校長は、私が行ったときの六高の教頭です。

岡野〔義三郎〕先生、といっただけ。そして、私が行く頃に、名古屋の八高の校長〔第二代校長：一九一八年九月―一九二一年十一月〕になったのです。すると、岡野さんが、別段、私は岡野さんにお世話になったことではないのに、電話が来て「八高へ来ないか」と。それはいろいろな意味で世話になったのですが。そのとき何も岡野さんを慕って行ったわけではないのです。私は東京に家がありましたから、当時は岡山から東京まで帰るのは大変なのです。休みのときも時間が掛かって。(笑) 名古屋はちょうど半分ですね。それで「行きましよう」ということで、岡野さんにお世話になって、八高の先生になりました。そして、八高に四年いたのです。

それからどこへ行こうと思ったのですが、そうしたら、今度、私を六高に採ってくれた陸軍大尉の校長さん、金子〔詮太郎〕さん、という人が六高の校長〔第二代、一九一〇年十一月―一九一九年一月〕から三高の校長〔第

四代、一九一九年一月―一九二二年八月〕になったのです。そして、静岡に新しい高等学校を作るときに、その校長に金子さんが。私は前に知っているでしょう。それで「来ないか」というわけです。これはまた東京にまた半分近づく。(笑)。それで静岡へ行ったのです。

私は静岡から出ようとは思わなかったのです。静岡で一生を終わって、そのあとここで隠居すればいいと。そして十五年目になったのですが、そのとき四十八かな……もう五十近かった。老教授になって、隠居するなら沼津でいいと思って。

そうしたら、戦争が近づいてきた。そこで、一高で生徒主事をしている佐々木という人ですが、彼は立教中学校で元先生をした人です。それから、のちにここへ来ましたよ。高等学校へ来ましたよ、佐々木喜市さん(戦後、立教高等学校設立時の主事)。

—— ああ、喜市さん。ええ、ええ。

佐々木 だから、喜市さんはいろいろなことで……。あれが一高の生徒主事。彼とも親しかったのです。けれども、三谷君が教頭だったのです。三谷君が私を思い出したのです。(笑) 昔の友人だからね、突然 三谷から電話が掛かってきて「今日君に用があるから」と言っていて、静岡へやってきた。早い汽車でやってきたのです。朝たつて、お昼頃来て「何だろう」と思ったら「君、一高へ来



てくれないか」「ぜひ来てくれ」と。(笑)。それで引越したのです。そうして一高へ来て、もう私はだいぶ長く、そこで四、五年……、もう校長になってもいいということになってきたのです。

ところが、戦争になってしまった。耶蘇教は非常に嫌われていた。それで、文部省が人を監督しているのです。私はそんなことは知らなかった。それで「台湾か朝鮮の大学に予科長になって行きませんか。特に朝鮮……。」と言われた。「僕はそんなに校長になりたくて一高にいるわけではない」「僕は高等学校が好きなんだ」と。

そうしたら、六高で私が教えた学生が、文部省にいた。それがある日突然、一高へ……戦争の最中ですからね、車でやってきたのです。普通の先生などはみんな呼び出すのです。しかしやってきたのです。私も「あいつはそうだな」と思って、教えた……。局長でいばっていることを私は知っていたのです。それがやってきて「先生、高等学校長になってくれますか」と言うのです。「先生、東京ならいいですよ」と。東京はそれほどやかましくありませんでしたから。「今度は都立高等学校校長が辞めますから、先生、あそこへ行ってくれませんか。あそこなら大丈夫ですよ。(キリスト教の話をしていても)文句は出ませんから」と。「それじゃあ、行くわ」ということで行ったのです。

都立へ行ったら、これまたのんきなもので、いろいろなことはありますけれども、やはりその通りで。そして、父兄会にはいろいろな名士の父兄がいるのです。だから「あれはだめ」「これはだめ」とか、あまりケチなことは言わないのです。

—— ああ、なるほどね。

佐々木 私に務まったのですね。幸いなことに、誰も親が悪口を言わないのです。むしろ生徒のあいだで評判が良くて。(笑)。あの時分の戦争というなら「鬼畜米英」論でなくてはならないのです。しかし、私はそんなことはできないから。やはり軍部から嫌われるけれども、私はそんなことは言わないで、やはりちゃんとしたことを言う。

私はときどき生徒を集めて、聖書の話などをしたのです。それが評判になってしまつて「佐々木先生は戦争中、聖書の話をした」と。聖書の句を引いて話をしたのですが。私は漢学とか他のことはあまり知らないのです。聖書のことは、いくらか知っているけれども。だから、聖書の句を題にして話すと、一つ話がまとまるでしょう。そして、学生にその話を一カ月に一回ずつ……。

いろいろ問題になったらしいんだけどね。「君たちはアメリカを甘く見てはいけない」と。「よく日本の人は『アメリカ人は命を惜しがる』とか何とか言うけれ

ども、英米人というのは決してそうじゃないんだ」「それは『どうせ死ぬんだ』『ただ死ぬんだ』というようなことはしない。『こういうふうにすれば九死に一生を得て仕事ができるんだ』というようなことはやるんだ」「これは英米人の違った方法で、だから『死ぬことを嫌がるから、向こうの人は弱い』などというのは大間違いだ』というような話を、生徒に聞かせたことがあります。それで生徒も大変面白かったのでしょうね。どういうわけか、先生も誰一人、私の悪口をあまり言わないのです。仏教の坊さんがたくさんいるのですが、どうして言わないのか。「佐々木は聖書の話をする」と伝わってしまった。そして、そのうちにキリスト教迫害、聖公会迫害が起きました。私は香蘭の理事をしていましたが、迫害騒ぎで須貝さん、佐々木（鎮次）さん<sup>(23)</sup>が、皆さん代わったでしょう。つまり外国の関係があるからということ。あの事件が起って「佐々木（順三）もそうだ」と。それで憲兵が調べに来たわけなのです。都合のいいことに、どういうわけか私を捕まえに来ないで……ただ、東京都の局長のところへ行って「佐々木はスパイの疑いがある」と。須貝さんが捕まったでしょう。それで心配してしまっ、局長が調べてみたのでしょうね。いろいろなことを言っていたのですが、どうしたことか、私を捕まえることはなかった。

そのときは都の局長が、私の庶務課長のところへ来て「うわさがあるが大丈夫か」とか言って。それから、その人が「しかし、先生、あまり聖書を引かないでください」というようなことを……。そして、とうとう最後までも何でもなかったのです。東京だから良かったのでしょうね。

面白いことに、あの時分は教育勅語を少しでも間違えたら大変ですからね。私は初めて校長になったときに、それは知っていました。勅語を読み違えたといって、やられた人もいますからね。私もそれはちょっと気を付けなければと思いました。勅語を読むときは来たのです。それで私は壇に上がって、勅語を庶務課長が持ってきたから、私は受け取ったのです。このようにして載せてきて、盆に置いてきた。そうして、ふっと開けてみたら逆さまなのです。向こうの人が持ってくるときは正しいのです。しかし、私のところにそのままよこすから、そして、こちらはそれを知らないから、そのままいいと思って置いたら反対なのです。初めてでしたからね。勅語を逆さまにしたとか言われなくても限らないから、困ったなど……すると、都合のいいことに、あの頃は勅語を読むときは最敬礼です。私が広げたときに、軍人の配属将校が「最敬礼！」と言って、軍人だけでも、みんながこうやっていた。それで知らん顔して読んでいる。面白

いことがありました。それで難を切り抜けてね。帰ってから「今度、逆にして持ってこいよ」と言って、それからちゃんとやりました。そういう面白いことがずいぶんありましたよ。

——なるほどね。(笑)。

**佐々木** それで、とにかく都立高等学校は文句なしにね、戦争も終わって。そうすると、立教で〔幹部追放〕問題が起こったでしょう。そして、今度は立教に行かなければならない。立教に行くということは、結局、南原さんからのでしょう。南原さんは内村〔鑑三〕さんを介して、三谷君の大親友なのです。私が南原さんを知ったのは、三谷君を通して知ったのです。南原君とは一度ぐらい、前に会ったことがあるかもしれないけれども、あまり話したことはない。三谷は戦争中に死んだのです。そのときに南原さんと一緒になって、いろいろな世話などをして、南原さんはそのときに私を知ったのです。

それで、南原さんは三谷が死んだので、私がいいと思ったのですね。それで立教へ来たのです。

——ああ、そうですね。

**佐々木** そうしますと、全てが六高関係です。三谷君、それから六高の教頭さん、それから六高の校長さん、静岡、一高へは六高の三谷君。それから都立高校へは六高で教えた生徒。それから立教へは三谷君。六高の関係。

南原さんは六高ではないですね。それで、いつもそういう関係で親しい人から呼ばれて行ったので、私は一度も就職運動をしたことがないのです。

——やはりそれは先生の徳なのですね。

**佐々木** それだけは私は誇りと思っています。先生のおいだでは、ずいぶん就職運動をするのですよ。

——そうですね。

**佐々木** そのような面白いことがありました。

——最後が立教で、それで満足なさっていらっしやるのですから、一番よかったですね。

**佐々木** 立教を辞めたから、どこか行って働こうというようなことはしないですね。しかし、立教が最後で大変……やはり一番いい仕事をした、奉仕をしたと思うのは立教ですよ。立教で働いたということが一番ありがたいことです。一番満足な仕事を最後にやりました。

——いいことをしたと思って、何も立派な腕を振ったということはちっともないけれども、立教で働いたことが、一番満足な生涯であったということです。これはもうお世辞なしです。やはり神様にどの程度の奉仕をして働いたかというのは立教だけですからね。そういったことが分かっているのは。あとは教育でということですから、直接、神様に働くのだということを考えていると、立教が一番ありがたいですよ。(笑)。

—— 今日は本当にいろいろお伺いいたしました、ありがとうございます。

佐々木 いやいや、くだらないことを。

—— いいえ。これだけ詳しく聞いた人もいないと思いますので。(笑)。

佐々木 そうでしょう。

—— はい。このテープは記念になります。お疲れでございました。

佐々木 いえ、どういたしまして。

—— それでは先生、本当にどうもいろいろとありがとうございました。

佐々木 どうもありがとうございました。(了)

聞き手 松原…立教学院チャプレン

村田…同チャプレン室職員

註

(1) 桃山学院…一八八四(明治十七)年、英国教会宣教師ワレンによって大阪川口居留地に開かれた塾に淵源をもつ聖公会系の私立学校。現在中学校・高等学校・大学を擁する。

(2) 佐々木二郎…順三の次兄。一八八五年〜一九七二年。日本聖公会主教。一九〇三(明治三六)年受洗。〇八年東京三一神学校を卒業。一九四一(昭和十六)年、京都教区初代の日本人主教となる。第二次大戦中、国策非協力の名目で迫害を受けた。

(3) 佐々木邦…順三の長兄。一八八三〜一九六四。英文学者で、著名なユーモア作家。青山学院中等部、慶応義塾大学予科、明治学院高等部に学ぶ。第六高等学校教授、慶応義塾大学教授、明治学院高等部講師などを歴任、戦後は明治学院大学教授に復職。代表作に『愚弟賢兄』『苦心の学友』『村の少年団』など。一九七四年、講談社から全集が出版された。一九六三年、日本聖公会の洗礼を受ける。

(4) 井深梶之助…一八五四〜一九四〇。会津藩校芋頭長の長男。オランダ改革派宣教師S. R. ブラウンの東京一致神学校(のちの明治学院)卒業。一八九〇(明治二三)年米国留学。一八九一年、明治学院の総理。山県有朋内閣の宗教教育抑圧(文部省訓令第12号)に抵抗した。

(5) 本多庸一…一八四八〜一九二。津軽藩出身。オランダ改革派宣教師J. H. バラのバラ塾に学ぶ。八八年米国留学。帰国後九〇年、東京英和学校校長。九四年、青山学院と改称し、院長となる。井深同様、九九年の文部省訓令第12号等に抵抗した。一九〇七年、日本メソジスト教会初代監督。

(6) 普連土学園…一八八七(明治二〇)年、アメリカ・フィラデルフィアのフレンド派(クエーカー)に属する婦人伝道会の人々によって、女子教育を目的として設立された。現在、中学校、高等学校を擁する。

- (7) 柳原貞次郎…一八八六〜一九七三。日本聖公会主教。京都帝国大学、大阪三一神学校卒業。一九四〇年、大阪教区の補佐主教、四二年に主教となる。
- (8) 早川喜四郎…一八六五〜一九四三。日本聖公会司祭。八三年、ウィリアムズ主教から受洗。立教学校、東京三一神学校で学ぶ。一五年から四〇年まで京都の平安女学院院長をつとめた。
- (9) 平安女学院…一八七五（明治八）年、アメリカ聖公会のミス・エディが開いた「エディの学校」が起源。八〇年照暗女学校と改称、九五年、京都に移り平安女学院となった。現在、幼稚園から大学までを擁している。
- (10) ヘンリー・セントジョージ・タッカー…一八七四〜一九五九。アメリカ聖公会総裁主教、立教学院総理。ヴァージニア大学、ヴァージニア神学校卒業。一八九九年来日、一九〇三年立教学院総理となり、池袋移転、大学昇格の礎を築いた。一三年帰米。三八年から四六年までアメリカ聖公会の総裁主教をつとめた。
- (11) 須貝止…一八八三〜一九四七。日本聖公会主教。立教大学、聖公会神学院で教鞭をとった。四一年、聖公会神学院校長、日本聖公会横浜教区（南東京教区）の主教となる。戦時下、聖公会の日本基督教団への合同に反対したため、軍当局の圧迫を受けた。
- (12) 南原繁…一八八九〜一九七四。東京大学総長。政治学者。第一高等学校時代は三谷隆正、森戸辰男らと同級。校長の新渡戸稲造の影響を受け、内村鑑三の聖書研究会に出席。東京帝国大学卒業。同大学教授を経て、四五年、戦後初の東京大学総長となる。
- (13) 松崎半三郎…一八七四〜一九六一。立教学院院长理事長、森永製菓社長、森永乳業社長。九六年立教学校卒業。森永商店に入社。三一年、立教学院の邦人初の理事になる。三五年、森永製菓社長、四三年、立教学院理事長、四九年、森永乳業社長。
- (14) 須藤吉之祐…一八七六〜一九五六。日本聖公会司祭、立教大学総長事務取扱。立教学校卒業。一九〇八年、立教大学教授。四五年、幹部の追放により立教大学総長事務取扱、立教工業理科専門学校校長事務取扱、立教中学校長事務取扱をつとめた。
- (15) ポール・ラッシュ…一八九七〜一九七九。アメリカ・ケンタッキー州出身。一九二五年、関東大震災後のYMCA復興支援のため来日、翌年立教大学教授となる。日本聖アンデレ同胞会を創設し、三八年、山梨県清里に清泉寮を開設。戦後GHQの将校として再来日、立教の幹部一名の追放にかかわった。五六年、清里で財団法人キープ協会を設立。清里の父、フットボールの父と称されている。
- (16) カール・ブランドスタッド…一八九八〜一九七一。アメリカ・イリノイ州出身。二四年来日、立教大学文学部教授として教鞭をとる一方で、聖歌隊指揮者をつとめた。オーケストラ、グリーククラブなどの音楽活動も指導した。
- (17) フランシス・ボウズ・セイヤー…一八八五〜一九七一。アメリカ・ペンシルベニア州出身。文学博士・法学博士・外交官。永年大学教育に献身する一方、シャム国特命全權大使、米国國務次官補等の要職を歴任した。第二次大戦初期、フィリピン高等弁務官、後に国連信託統治委員会議長。一九四九年、国連総会米國代表。五二年一〇月から約一年半立教大学構内に居住し、日本聖公会ならびに立教学院の再建・発展に尽力した。
- (18) チャールズ・S・ライフスナイダー…一八七五〜一九五八。日本聖公会主教、立教学院総理。アメリカ・メリーランド州出身。ケニヨン大学、ベックスレー神学校卒業。一九〇一年来日、一二年、タッカーの後任として立教学院総理に就任、池袋移転、大学昇格を指揮した。

三一年立教学院総長、三五年同理事長。

(19) 遠山郁三…一八七七〜一九五一。立教学院総長、立教大学学長。一

九〇二年東京帝国大学医科大学卒業、二六年から東京帝国大学教授。三七年、立教大学学長、四〇年、立教学院総長。医学部設置計画を推進したが失敗し、四三年辞任。

(20) 西村敬太郎…一八九二〜一九七一。日本聖公会司祭。立教中学校、

立教大学、聖公会神学院卒業。戦時中、前島潔の後を受けて『基督教広報』の主筆となる。四五年、聖公会教務院院長に就任、四六年、高松孝治の後任として立教大学チャプレンに就任。

(21) 中川一郎…一九一三〜一九七六。立教大学文学部卒業。立教大学文学部英米文学科教授。四七年から五七年まで体育会長をつとめた。

(22) 三谷隆正…一八八六〜一九四四。明治学院普通部を経て第一高等学

校に入学、校長・新渡戸稲造の読書会、内村鑑三の聖書研究会に参加。東京帝国大学法科大学を卒業し、第六高等学校教授、第一高等学校教授を歴任。姉に三谷民子（女子学院院長）、異父兄に長谷川伸（作家）がいる。

(23) 佐々木鎮次…一八八五〜一九四六。日本聖公会主教。麻布中学校から

聖教社神学校に進み、オックスフォード、ケンブリッジで学ぶ。聖公会神学校の幹事、教授をつとめる。三五年、中部教区主教、九年のちに東京教区主教となる。戦時中の日本基督教団への合同問題では、一貫して非合同を貫いたため、憲兵隊に連行された。